探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：府中町立府中中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
府中中学校	20	638
府中小学校	30	871
府中東小学校	16	398
府中北小学校	15	356

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

「主体的・対話的で深い学びの創造　～探究的な学習のカリキュラム開発・実践・連携～」

昨年度までの２年間でカリキュラムの開発実践を行ってきたことを生かし、さらに内容を充実させ、中学校区としてつながりのある学びを生み出すため、今年度は「連携」を加えて取り組むこととした。

（２）資質・能力の設定について

初年度４校で整理し作成した、府中中学校区で中学校卒業時に目指す資質・能力を活用した。

（３）取組について

①評価指標の児童・生徒との作成・活用

中学校区で整理した資質・能力を基盤とし、中学校卒業時に目指す姿を基に、各校で単元ごとに評価指標を児童・生徒と作成し活用した。

②9年間の学びを関連付けたカリキュラムデザイン

中学校区における生活科及び総合的な学習の時間の学びのつながりを整理した「9年間の学びマップ」を作成。 小中での取組や他教科での学びを関連付けたり、ジブンゴトにしたりするために活用した。

２　実践事例

①　府中町立府中小学校

本年度は、子どもたちが学びの主役で、ジブンゴトとして学びを展開することを目指して授業実践に取り組んだ。そのために、学習のゴール像である「ルーブリック評価」を教師と子どもで共有するとともに、評価規準を「子どもたちの言葉」でつくることに取り組んだ。また、「ゴール像」に向けて教師と子どもが「共に歩む」ことを意識して、学びを深めた。

○総合的な学習の時間「身近な環境と私たちの暮らし調べ隊」（第４学年）

地球の現状について調べる中で現状では私たちの生活、地球の未来が危機であることに気付いた。その中で、「少しかもしれないけど、自分たちにできることを実行していきたい」という思いを強くしていた。そして、「ペットボトルキャップ」を回収すること、集めた牛乳パックを活用して「リサイクル工作」に取り組むことなどを考え、実行していくことができた。

○総合的な学習の時間「未来へのかけはし」（第6学年）

本校が創立150周年であることをきっかけに、「府中小学校の歴史を調べ、特別な一年をより特別にする」というゴール像を設定し、様々なプロジェクトを展開した。例えば、150周年オリジナルキャラクターづくり。そのキャラクターを使っての階段アートづくり。150周年記念のリーフレットづくりなど、子どもたちが考えた取組を実行した。取組の成果を「150周年記念式典」の中で多くの方に伝えると共に、子どもたち一人ずつの「志」の形成につなげていった。教師が設定したゴール像に引っ張っていくのではなく、ゴール像を子どもたちと設定し、共に歩んでいくことで、子どもたちが意欲を持ちながら、学びを深めていくことにつながっていた。

②府中町立府中東小学校

本校では、昨年度の実践において、自分たちが設定した課題を解決した後、新たな課題を見付けることの難しさを感じていた。児童にとって、自分たちの課題を解決できたことで満足してしまい、さらなる高みを目指す課題を見つけることは困難だった。それは、「単元を貫く問い」の児童との共有はできていたものの、「本質的な問い」の共有が十分ではなかったからだと考えた。そこで今年度は、児童がより主体的に学習できるようにするための方法として、「『本質的な問い』の児童との共有」と「めあてとルーブリックを関連付けて児童と一緒に設定」に取り組んだ。

○生活科「じぶんでできるよ」（第1学年）

単元を貫く問いを「もうすぐ2年生。どうしたら自分でできることを続けたり、もっと増やしたりできるかな。」、本質的な問いを「これからも自分でできることを見つけて増やしていきたいな。家族や友達と支え合うためには、自分には何ができるかな。」として、意欲的に学習を進めた。

家庭で実践したことについて話し合う前に、自分の実践を振り返って付箋に書くことで、活動に対する気付きを深めることができた。その付箋を示しながら話し合うことで、伝えたい内容や思いを確かに伝えることができた。また、同じグループでもそれぞれ考えたコツが異なっていることに気付いたり、他のグループの発表を聞いて新しいにチャレンジを見付けたりと、意欲的に学習を進めることができた。

○総合的な学習の時間「大切な人の笑顔を守ろう！防災プロジェクト」（第5学年）

単元を貫く問いを「助けられる人から助ける人になるために自分たちには何ができるだろうか。」、本質的な問い（児童とは「ずっとの問い」として共有）を「明日も明後日も大切な人たちと府中町で笑顔で暮らしていくために、自分たちには何ができるだろうか。」と設定し、学習を進めていく中で何度も問いに立ち返り、どう進めるべきかを考えることができた。

たくさんの人に減災について伝えるために、まずは自分たちが実際に体験して学ぼうと主体的にゲストティーチャーに連絡を取った。みくまり峡森林公園の間伐体験をしたり、５年前の西日本豪雨の際、土石流の起点になった場所について解説をしてもらったりしたので、もっと学習を進めたいという気持ちをもつことができた。また、府中中学校の生徒主催の避難所体験にも参加させてもらった後、単元を貫く問いに立ち返ることで新たな課題を見つけることができた。

③府中町立府中北小学校

本校では、学校教育目標「自ら育つ」のもと、「分かる・できる・関わる喜び」に焦点をあて授業実践に取り組んだ。「適用力・探究力・向上心」について学年ごとに具体的な児童の姿を想像し、共有することで、全教員が同じベクトルで指導ができるようにした。到達したい姿を児童と一緒につくることで、ゴールでのなりたい自分をイメージして学習し、意欲的に学習に取り組むことや、リフレクションから次なる課題を設定することに取り組んだ。

○生活科「たのしいあきいっぱい」（第1学年）

身近な自然の様子が、夏から秋になって変化していることに気付いた。その中で、秋の葉っぱや木の実を使ってどのような遊びができるか知りたい、やってみたいという思いをもった。「よく回るどんぐりごまを作りたい」と考え、どんぐりの種類や穴を開ける位置、深さをみんなで試行錯誤した。細いどんぐりでは穴が開けにくかったりバランスが取りづらかったりすることに気付き、太いどんぐりを使って作るとよく回るこまができることを共有した。再度適した材料をたくさん集め、目的に合ったどんぐりごまを作り、楽しく遊ぶことができた。

○総合的な学習の時間「災害から命を守る」（第5学年）

過去に起きた東日本大震災や西日本豪雨などについて調べ、災害の恐ろしさに気付いた。防災に関する新聞記事を読んだり、府中町役場の方から避難所についての話を聞いたりする中で、自分や家族の命を守るために自分にできることがあるのではないかという思いをもち、「あなたが家族の防災リーダー」という副題を設けて学習を進めた。防災リュックを用意することの必要性に気付き、災害時に本当に使える物はどんな物か考えを出し合い、自分にとって最適なオリジナルの防災リュックの中身を考えた。また、防災フェスタで保護者の方に、災害が起きた時の避難所の様子や取るべき行動を家族の防災リーダーとして伝えることができた。

④府中町立府中中学校

今年度はそれぞれのプロジェクトにおいて、課題をよりジブンゴトとしてとらえ、解決に向けて具体的に主体的に行動を起こすことを目指した。その方法として、小学校での学びをふまえ、さらに発展的な活動として生徒主体で取り組んだ。

○総合的な学習の時間「『探究・椿』地域貢献(平和)プロジェクト：継・伝・広～伝承・発信のためにできること～」（第1学年）

本質的な問いを「平和で安心・安全な街とはどのようなものだろうか」とし、単元を貫く問いを「平和に暮らすにはどのようなことが必要だろうか」とした。

出身小学校での学びを共有する中から、今までのように知るだけではなく「伝承・発信」することが必要だということに気付き、仲間とともに「伝承・発信」の方法やツールを準備・作成した。８月９日の平和登校日では、１～３年生が混在したグループで「核兵器は必要か」など生徒自らが設定したテーマについて討論し考えを深めた。その活動の中で、平和公園へ行き観光客に「発信」することが「伝承」につながる取組になるということ、またそのためには英語での準備も必要だということに気が付き、外国人への発信の準備も始めた。

平和公園では、自分たちで準備したパンフレットや紹介カードを使って「伝承・発信」し、海外からの観光客には「世界が幸せになるには何が必要か」というインタビューも行った。その後、インタビューの内容をまとめてポスターを作ったり、学んだことを１分間でプレゼンし合って共有したりした。

取組を通して、様々な角度、立場で平和について考えることが必要であること、自分たちで考え行動することの大変さと同時に楽しさや充実感を多くの生徒が味わっていた。また、インタビューに対するお礼の手紙が海外から何通も届いたことで、英語での「伝承・発信」の必要性、重要性も実感できていた。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

学習者主体で授業デザイン、単元デザインをしたことにより、児童・生徒が主体的に取り組んだ。また、ルーブリックを用いてゴール像を共有したことで、学ぶ方向性が明確になった。その結果、令和５年度の３年生のアンケート調査において、「探究する学習に取り組んでいる」「もっと考えたい、調べたい」「実現したい夢や目標がある」の項目について１年次と比較して、「よくあてはまる」の回答がそれぞれ、14.5、17.3、5.6ポイント上昇していた。

また、小中の教師が相互に授業を参観し意見や情報交換する場を設けたため、９年間の学びの流れをより明確に意識できるようになり見通しをもったり関連付けをしたりしながら単元構成をすることができるようになった。

（２）課題

単元の初めに児童・生徒と「本質的な問い」を作成することに取り組んだが、課題に踏み込んで深まりのある問いを作ることが難しかった。また、教科とのつながりを持たせた取り組みとするのが不十分だった。

（３）今後の改善方策等

３年間通して取り組んできた、児童・生徒とともにルーブリックを作成し自主的に学びを進めていく手法をさらに深めていく。また、学びマップを活用し小中でのつながりや教科でのつながりを意識させ、課題をジブンゴトとしてとらえ主体的に解決していく取組をさらに広げ充実させていく。